

# 新しい感情の男—ウィリアム・ゴドウィンの『フリートウッド』における感受性と社会性

細川美苗

1805年に出版されたウィリアム・ゴドウィンの『フリートウッドまたは新しい感情の男』<sup>1)</sup>(以下『フリートウッド』)は、同名の主人公の半生を当人が振り返り語るという構成になっている。前半はフリートウッドが結婚に至るまでの人生と彼の精神的導き手であるラフィグニーの人生がそれぞれ一人称で語られ、後半はフリートウッドの結婚生活の破綻が描かれている。前半は教育論と社会批判的要素が多く、後半は年の若い妻が若い男と関係を持っているのではないかと疑う年老いたフリートウッドの内面に焦点を当てている。結婚生活という私的領域と個人の内面に執拗に迫り、不当に妻を迫害し、狂気に至るフリートウッドの感情の高まりを仔細に描写している。

当小説にはヘンリー・マッケンジーの『感情の人』(1771)を必ず想起させる『新しい感情の男』(*The New Man of Feeling*)という副題がつけられている。マッケンジーの『感情の人』は、他人の哀れな境遇に激しく共感し、打ち震え涙を流す男の物語であり、従来男性の美德とは考えられなかった「泣く」という行為または「涙」を、その人物の美德を示す記号として確立した。『フリートウッド』の主人公は、その『新しい感情の男』という副題にもかかわらず、全く他人に共感せず、自分の感情のみに浸りきっている自己中心的な人物である。当時からその副題と物語内容の関係は批判の対象であり、『フリートウッド』出版年である1805年のクリティカル・レビューは『フリートウッド』に関して、「我々は、従来のもの完全な否認でない限り、失望から人間嫌いに陥り、その原因を確かめる苦労もせず嫉妬に狂い、はなはだ残酷である男がな

ぜ「新しい感情の男」と称される事ができるのかを考えると途方にくれる」(『フリートウッド』付録G 517)と述べている。また、同年のエディンバラ・レビューも同様に「フリートウッド氏は同名の書物の3巻を通して完全にそしてもっぱら一人の個人のためにしか感じ入らない。そしてその個人はフリートウッド自身なのだ」(『フリートウッド』付録G 522)と評し、フリートウッドの人物像と副題の関係に批判的な書評を載せている。さらにアンチージャコバン・レビュー・アンド・マガジンも「ゴドウィン氏はこの意見を酷評だと感ずるかもしれないが、我々は彼の本の表題には反感を持たざるを得ない」(強調原文『フリートウッド』付録G 525)と、不快感を示している。現代においても当小説の解釈は定まらず、ガリー・ケリー<sup>2)</sup>は当小説をゴドウィンがジャコバン小説の書き手からロマン派的傾向を示し始める好例と評価している。一方B. J. テイスダール<sup>3)</sup>はフリートウッドの少年期がロマン派作家に描かれるものと対照的であると論じているが、リチャード・ベラミ<sup>4)</sup>はテイスダールに対し名指しで反論している。またガリー・ハンドワーク<sup>5)</sup>は、当小説をルソーの掲げる教育論に対する批判と解釈している。第3巻のほとんどを占める嫉妬に狂ったフリートウッドの結婚生活の破綻に関して、ゴドウィンがウィリアム・シェイクスピアの『オセロ』(1604-05)を意識しているであろうという点では、批評家の意見が一致している。本論においては、ゴドウィンの作家としての発展を考慮に入れ、『フリートウッド』において彼が何を目論んでいたのかを、特に作品後半部分に焦点をあて、感傷小説の流行との関連から論ずる。

## 1. 感傷小説の枠組みと『フリートウッド』

フリートウッドが妻メアリを徹底的に迫害するきっかけは、フリートウッドの若い親類ケンリックとメアリの不倫疑惑である。これは年老いた夫と若い妻、若い妻に言い寄る若い男という三角関係の構図を持っている。このような

三角関係のモチーフは、ジャン＝ジャック・ルソーの『ジュリ、または新エロイーズ』(1761, 以下『新エロイーズ』)の英国での流行から、当時英国小説で多用された設定である点は鈴木<sup>6)</sup>が詳細に論じている。ルソーの提示する枠組みでは、若い妻は感情の虜となり若い男の愛を受け入れる。鈴木によると『新エロイーズ』の提供するパラダイムは、一組の男女が愛し合っていれば、社会の慣習、しきたり、制度に逆らっても、二人にはその愛を成就させる権利があり、美德に対する情熱を持ち、自然の感情、感受性、感性、衝動を自分の行動の指針にすれば、社会通念上は罪に満ちた恥ずべき転落も賞賛すべきものとなるというものである。若妻の社会通念上禁じられた行為は、自然とわきあがる感情とそれに従うことを称揚する風潮の中で、善とも悪ともつかぬ判断を受ける。鈴木はこのモチーフの結末を二分し、英国において革命思想を支持するグループの著書においては、感情の赴くままに愛を求める女性の姿を美德と描き、保守的な書き物においては、そのような女性には無残な末路が用意されていると指摘している。

『フリートウッド』において上記のルソー的枠組みは、大きく二点の変形が施されている。まず若妻メアリが青年ケンリックと関係を持つ事もなく、二人はそもそも愛し合っていない。若い二人の恋愛は年老いた夫フリートウッドの完全な妄想である。メアリは慎み深く、貞淑な妻であり、ケンリックと友人ルーザーの恋を仲立ちしている。第二の変更は、感情の赴くまま情熱に任せて行動しているのは若い妻ではなく、年齢を重ねた夫の方だという点である。これらの変更によって、ルソーの枠組みにおいては善悪の判断の分かれるところであった若妻の落ち度が払拭され、彼女には全く非がないという新たな設定となる。このような状況で、自分の妄想を根拠にメア리를迫害する夫フリートウッドは、全く読者の共感を得られない。1805年のエディンバラ・レビューは「読者はすぐにゴドウィン氏の世界において感情の人はこの世で最もわがままな動物であると気づく」(『フリートウッド』付録G 520)としている。

当時の批評の共感を全く買わないにもかかわらず、ゴドウィンが感傷小説の

枠組みを利用し『新しい感情の人』という副題を選んだ理由を求めるには、感傷小説 (novels of sentiment, sentimental novels) というジャンルの特性を考えねばならない。ブリセンデンによると、18世紀前半においては道徳見解や好ましい意味での瞑想や美的感情とその表現という意味合いが強かった「センチメント」という語が、18世紀後半には表面的な情動に耽溺することや、感情に揺さぶられやすいという否定的な意味合いを持ち始める<sup>7)</sup>。この展開にルソーが大きくかかわっているとブリセンデンは指摘し、「ルソーによってセンチメントという語はロマンティックな、道徳的な、そして半ば神話的な新しい傾向を取り入れた」と論じ、「意見に関する小説が感傷小説に道を譲る」と総括している (112-115)。19世紀に入る頃には感傷小説というジャンルは、芝居じみた大げさな感情と情熱のままに破滅に向かう主人公といったステレオタイプによって揶揄されることとなる。

ゴドウィンが『フリートウッド』を書いた19世紀初頭には、感傷小説はすでに意見に関する小説という肯定的意味合いを失いつつあり、感情への耽溺という否定的な含みが強くなっていた。確かにフリートウッドは嫉妬心を制御できずに家庭を崩壊させる男である。しかし『フリートウッド』には道徳的意見に関する小説という肯定的な意味合いも含まれている。ブリセンデンは道徳的意見に関する小説について『『ある貴婦人の肖像』または『ユリシーズ』…など、力点が人物の行動にあるのではなく、内省、または登場人物たちの内面生活におかれたあらゆる小説である』と述べている (98)。ジョン・ミュラン<sup>8)</sup>も同様に「感傷的なテキストの魅力は話の進行よりは感情にあるところに支えられている」と述べている (120)。『フリートウッド』には、彼の苦悩や嫉妬の感情がつぶさに描写されており、出版当時のクリティカル・レビューはゴドウィンの小説のスタイルは、主人公が出会う出来事を描くのではなく、主人公が行う人間や人間行動に関する独白や内省を読者に示すという特徴があると述べている (『フリートウッド』付録 G 517)。主人公の内面を執拗に追うストーリーは、物語があまり進行せず退屈であるが、ゴドウィンは感傷小説の持つ

内省という傾向を存分に利用している。ティスダールはゴドウィンのこの傾向に関して、「かれは感傷小説にあるような家庭内の危機のみならず，社会的，政治的そしてまた心理学的な事柄に関する知的および道徳的反応に関して熟考するために〔物語を〕中断する」と述べている（107）。つまり『フリートウッド』においては，感傷小説の持ちうる肯定的な側面である内省が十分行われているといえる。

一般的に感傷小説には，他人の不幸を自らのことのように悲しむ美德の持ち主を描写し，読者に同様の道徳的に好ましい反応を促すという教育的効果がある。しかしミュランは感傷小説で称揚される美德は主に隠遁生活に見出されるという点から，その理想の現実性に関して否定的な意見を示している。ミュランは感傷小説で美化される隠遁とその場での理想の人間像は，現実社会において実行されうるものではない点，及びその理想像の影響範囲も社会全体へ拡大することはなく，私的な空間に限定される読書行為を通じ感傷性というコードを共有したアッパーミドルクラスの限られたコミュニティーにとどまると指摘し，感傷小説は私的な空間を超えて社会全体を改善することはできないと述べている（135）。

## 2. アンチ・ヒーローと小説の有用性

自分の感情のみに異常に敏感で他人に共感せず，人間嫌いで隠遁する『フリートウッド』の主人公は，従来の感傷小説の枠組みを脅かす。というのも，ティスダールが指摘するように，フリートウッドにおいて描写される感情の高揚は，従来感傷小説において繰り返されてきた感受性と美德の繋がりを断ち切るからである（104-106）。フリートウッドは自分自身を「凝り固まった厭世家」（a confirmed misanthropist）と称し，「私の本質的傾向は陰気で過敏なものであった」（My constitutional temper was saturnine and sensitive 215）と述べている。従来の枠組みを戯画化する主人公フリートウッドは，感傷小説特有の束縛

を越境する可能性を持ち合わせている。

当時の批評が示すように、『フリートウッド』の読者は狂気に至る主人公に共感するどころか、自分の感情に盲目的に突き動かされるフリートウッドの行動に批判的になり、彼の独善的な判断や度重なる状況の読み違えを、彼の隠遁生活の結果であると考ええる。このようなプロットは主人公フリートウッドのように過度の感情に耽溺することの危険性を示し、人との交流を求め意見の相対化を図るようにと読者を教育する。もちろんゴドウィンにとって個人における道徳の向上は社会全体の改善と結びついている。ゴドウィンは当時広く読まれた感傷小説の枠組みを利用しながらも、そこに潜む欠点、つまり個人的に洗練された感情を楽しむばかりで、実際の社会改革へと読者を導かない点を克服し、個人の社会化とそこから派生する社会全体の改善に寄与する小説を書いたのだ。ゴドウィンの『政治的正義』から1831年に出版された『人間論』までの変化を論じた論文でベラミは、ゴドウィンにおける「教育された共感とはいまや特定の理性に関する公理の崇拝ではなく社会において他人と関わることから得られる感情教育の産物である」(431)と述べている。ここでの感情教育とは一般的な感傷小説において称揚される現実離れした隠遁生活で経験される感情ではなく、他人との関わりから生まれる社会化された感情である。1831年に完成するゴドウィンの理想とする感情教育の萌芽は、1805年の『フリートウッド』においてすでに表れている。

以上のことは『フリートウッド』における夫と妻の描き方が、当時の男女のステレオタイプを逆転させている点からも説明できる。夫フリートウッドは人間嫌いで感情的であり妻メアリは社会的である。メアリは嫌がるフリートウッドを説き伏せて彼を教会へ連れて行き、近隣の住人と交流を深める。メアリは、典型的な感傷小説のヒロインのように、困難に直面し言葉を失い泣き崩れる女性ではなく、フリートウッドの横暴に理性的に対応しようとする人物である。結婚当初メアリはフリートウッドの性質を見極め、このように言う。「フリートウッドよ、私には欠点があります。あなたも確かに欠点を持っています

ね。あなたはとても気むずかしい人ですね。私には分かります。」(282)

すでに述べたように、中年の夫と若い妻、そして妻に言い寄る若い男という構図は、ルソーの影響から流行した感傷小説のひとつのパターンであるが、『フリートウッド』では二人の男性の間で揺れる女性の内面ではなく、貞節な妻を疑い虐待する夫の感情がつづられている。従来理性と関連付けられる男性・夫であるフリートウッドは、メアリを信じいたわろうとする気持ちと、彼女の浮気を疑い苦しめようとする感情の両極を常に行き来している。彼の「尊大な自己と卑下の気持ちの間のゆれは、これらの感情的に極端な状態を穏やかにするのに役立ちはせず、その代わりに彼の気持ちの次第にひどくなる荒々しいゆれを生み出すのだ。」(ハンドワーク 395) それに対してメアリは安定した性格であり、常に率直に自らの気持ちを明かした上で、夫の意向を尊重する女性である。そのようなメアリをフリートウッドは「飽きっぽく移り気だ」(『フリートウッド』325)と断罪する。この嫌悪はメアリ個人から女性全般へと拡大し、フリートウッドは「女性はすべて同じだったのだ。それを疑ったなんて、自分はばか者だったことか！」(『フリートウッド』326)と叫ぶ。二人の性格付けが通常の性差に基づく「感情／女性」と「理性／男性」の二分とは逆である点は、読者の目に明らかであるのみならず、自らの過去を振り返り語るフリートウッド自身によっても自覚されている。フリートウッドは実は移り気な性質であったのは、自分の方であったことをこのように語る。「私は自分が最も移り気でわがままな存在であることを固く信じます。私は決して長い間一つの心の状態のままにいることはなかった。溺愛、不安、言いようのない無関心に続き、私の精神は心配事で疲れ果て、時には閉塞状態に陥るものであった。」(『フリートウッド』320)つまり、フリートウッドが度々妻メアリと女性全般に投げかける「移り気である」という軽蔑の言葉は、実は彼自身の性質を言い当てており、過去の彼の行動が愚かで盲目的であった事を暴き出すのである。

感傷小説における「理性と社交」対「感情と隠遁」の二分では、通常は前者を物質的な資本主義経済に基く生活様式や意識と関連づけ、後者を精神的な金

銭を介在させない人間関係を結びつけた上で、後者に価値が付与されるが、理性的かつ社会的なメアリに読者の共感を集めることによって、『フリートウッド』では前者への価値付与が成される。こうすることによって当小説はミュランが指摘した感傷小説の欠点、つまり実際の社会改革効果がないという点を改善し、メアリに体现される理性的社会参加を肯定するのである。メアリの理性は、ゴドウィンが初期の『政治的正義』で擁護したような、感情を完全に排除した理性主義的個人主義ではなく、愛情を持って家庭生活や社交の輪を円滑に進めようとするゴドウィン後期の思想に沿ったものである。従来私的な空間と感情という領域を割り当てられていた女性の登場人物に、理性と社交という本来男性的とされる特質を与えることは、ゴドウィンの思想が男性的特質として理解される理性によって完全に感情を統御しようとする極端な理性主義から、穏健な後期の思想に向かっていることを示す兆候である<sup>9)</sup>。

ゴドウィンが感受性の力を実行力を持つ社会改革の基礎としたいと願ったことは、フリートウッドの祖父アンブローズの挿話からも指摘できる。アンブローズは父を失い路頭に迷うラフィグニー少年を助けた人物である。アンブローズは貧窮のうちにある見知らぬ子供の運命に共感し、手を差し伸べるといふすばらしい感受性の持ち主であるが、人間嫌いや隠遁とは無縁の人物である。彼は典型的な感傷小説の主人公が無縁であるはずの商業に携わり大きな財を成した。彼は道端で助けたラフィグニーと隠遁し、なす術もなく世の中の惨状を嘆くのではなく、ラフィグニーを立派な商人に育てリスボンへ送り出す。つまりアンブローズの感受性は、困難な状況に置かれたものを助け、社会に有益な人材として再び社会参加の道を開くという点で、実際に世の中を改善する力を持ち合わせている。このような感受性、人間同士の共感こそが、ゴドウィンが美德として提唱したかったものである。

ゴドウィンが感傷小説の枠組みを利用しつつジャンルの限界を押し広げたとしても、激情に任せて妻を迫害したフリートウッドの物語に『新しい感情の人』という副題が添えられる点にはやはり説明が必要である。『フリートウッド』

には過去の過ちを振り返りながら語る現在のフリートウッドと、語られる対象である過去のフリートウッドが存在する。批評家が主に「感情の人」の名に相応しくないと攻撃するのは、過去のフリートウッドの行状である。過去のフリートウッドは極度の人間嫌いから隠遁し、人との交わりを避け、共感できるたった一人の人物（この人物ギフォードこそが、フリートウッドの妄想を煽り、フリートウッドの財産を自分のものにしようと奸計を練る者である）との間で高ぶる感情に浸るといふ、ゴドウィンの批判する感受性の持ち主である。それでは過去の過ちを振り返りつつ語る現在のフリートウッドは「新しい感情の人」と考えられるだろうか。

フリートウッドに妻の不貞を仄めかし、彼の財産を奪おうとするイアーゴ的人物であるギフォードに死の淵まで追い詰められ、間一髪ケンリックに助けられたフリートウッドは、ようやく友人の話に耳を傾ける。友人の話から自分が根拠のない妄想により妻を迫害していたことを知り、フリートウッドはメアリに許しを請い家族を取り戻す。現在のフリートウッドは社交を通じて真実を知り、過去の過ちを償い、メアリと共に子を育成し社会に送り出す者であり、ゴドウィンの理想とする新しい感情の人である。現在のフリートウッドが自らの過去を反省しつつ語るといふ行為も、「新しい感情の人」の一面と評価できる。語ることは過去の過ちを他人と共有するという社会的行為であり、聞き手を啓蒙し社会全体の改善に貢献するからである。

### 3. 作者の声

最後にフリートウッドの語るという行為とゴドウィンの執筆行為の類似を指摘しておきたい。当小説は一人称の回想であり、個人の内面という他の語り形式では表現が難しい内容を描くことに成功している。その反面、回復したと主張しているものの、一旦は狂人となった語り手の言葉の信頼性は疑わしいものである。作品世界を作者からは独立したものとする場合には異なる判断が

あると考えられるが、本論は作者ゴドウィンの思想の変遷を考慮に入れ解釈をすることを目的としているため、語り手フリーウッドの声を作家ゴドウィンのものと比較したい。

フリーウッドの語りは、人との関わりを避けた結果、周囲の状況を誤って判断していた過失を公に認めた新しい理想的な「感情の人」の物語である。主人公フリーウッドの新しい世界認識は、作者であるゴドウィンのそれと一致している。彼は婚姻制度を否定し、家族愛も排した完全な理性的個人主義を『政治的正義』初版において謳った事で当時広く知られていたが、『フリーウッド』の前書きにおいてゴドウィンは、かつての自分の姿を髣髴させる「隠遁した個人」によって実行に移される理想の孕む危険性と、多くの人に議論され広く実践される改革の善性を主張している。(『フリーウッド』48-49)。このような前書きは、『フリーウッド』において表現される内容、つまり過去に誤って支持した隠遁生活や極端な個人主義に潜む危険を公に認め、社会化された主体の持ちうる社会改革の力を説くというメッセージとパラレルである。ゴドウィンは先の『政治的正義』で示した意見、つまり他人の意見に影響されない個人の純粹理性が理想的社会を形作るという理念を修正し、理想社会実現の基礎として社会化された感受性を打ち出したのである。ゴドウィンは『フリーウッド』に先立ち1799年に出版された小説『聖リオン』<sup>10)</sup>の前書きですでに『政治的正義』における自分の理性的個人主義の誤りを認めている。

私のより重々しい著作の読者のいくらかの方はもしかしたらこの些細な作品を読まれて私の非一貫性を咎められるかもしれない。この出版物の至るところにちりばめられ熱心に賞賛されるトピックである私生活における愛情と慈愛は、『政治的正義』においては寛大さや好意を持って扱われてはいなかった。この異議に応えるためにこの機会に私が言わなければならない全てのことは、私は4年以上もの間その哲学書におけるいくつかのチャプターをここにかけられている感傷性と調和させるための機会と時間を求めつづけていたという事で

す。私は家庭生活と私的な愛情は人間の性質や、心の文化とも呼ばれるであろうものから切り離せないものであると認識し、そしてそれらは深遠で快活な正義の感覚と両立できないものではないと全くもって納得させられたのであります（『聖リオン』 ix-x）。

『聖リオン』において主人公は自らの誤った判断において崩壊してしまった家庭を取り戻すことはできないが、『フリートウッド』では、新しい感情の人となった主人公は家族を取り戻し、新しい社会化された理想を求めてゆく。以上の点を考慮すると、従来感傷小説との関係から厳しい評価を与えられてきた『フリートウッド』は、歴史的、個人的な経験から理性的個人主義の限界を痛感し、その理念の修正を試みるゴドウィンが、当時流行していた感傷小説の枠組みを利用しつつも、新しいより有益なジャンルへと踏み込もうとする試みの表れであったといえる。この後ゴドウィンの小説はますます個人の内面へ焦点化してゆく。『フリートウッド』はフランス革命を契機に社会改革を志したゴドウィンが、その手段を政治的改革から個人の内面の教化と社会参加のあり方の改善へと転換した際、その転向に見合うジャンルを求める一つの過程であったと評価できる。

本稿は日本英文学会中四国支部第57回大会（2004年10月23日 於山口大学）における発表原稿に加筆訂正を加えたものである。なお本研究を行うにあたり2004年度松山大学研究助成（特別研究）を受けた。

#### 註

- 1) Godwin, William. *Fleetwood: or, the New Man of Feeling*. Eds. Gary Handwerk and A. A. Markley. Canada: Broadview, 2001.
- 2) Kelly, Gary. *The English Jacobin Novel*. Oxford: Clarendon Press, 1976.
- 3) Tysdahl, B. J. *William Godwin as Novelist*. London: Athlone, 1981.
- 4) Bellamy, Richard. "Godwin and the Development of 'The New Man of Feeling'." *History of*

*Political Thought* 6 (1985) : 411-432.

- 5) Handwerk, Gary. "Mapping Misogyny: Godwin's *Fleetwood* and the Staging of Rousseauvian Education." *Studies in Romanticism* 41 (2002) : 375-398.
- 6) 鈴木美津子『ルソーを読む英国作家たち—ルソーをめぐる思想の戦い』国書刊行会 2002.
- 7) Brissenden R. F. *Virtue in Distress: Studies in the Novel of Sentiment from Richardson to Sade*. London : Macmillan, 1974.
- 8) Mullan, John. *Sentiment and Sociability: The Language of Feeling in the Eighteenth Century*. Oxford : Clarendon Press, 1988.
- 9) ゴドウィンによる最初の小説『ケイレブ・ウィリアムズ』にはほとんど女性が登場しない。特にローラのエピソードが挿入される以前の初版においてその傾向が顕著である。
- 10) Godwin, William. *St. Leon: A Tale of the Sixteenth Century*. 1799. Rpt. New York : Arno Press, 1972.